



TITLE:

# 研究開発コロキウム(2011年度): 先天性心疾患術後患児の心理臨床学的・発達心理学的研究

AUTHOR(S):

中野, 江梨子; 西浦, 太郎; 江城, 望; 高橋, 優佳; 加藤, のぞみ; 岩城, 晶子; 小出, 文香; 白木, 絵美子

---

CITATION:

中野, 江梨子 ...[et al]. 研究開発コロキウム(2011年度): 先天性心疾患術後患児の心理臨床学的・発達心理学的研究. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 106-106

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179699>

RIGHT:

## 先天性心疾患術後患児の心理臨床学的・発達心理学的研究

### 1. 活動の概要

本研究グループの母体であるPaedie研究会は、平成5年より京都府立医科大学附属病院（以下、府立医大病院）小児科の外来にて、医療と心理臨床の実践の重なり合う現場で心理療法の実践を行い、研究会の成員の心理臨床実践力の研磨を目指して現在に至るまで臨床活動を継続してきた。加えて、医師や看護師などの医療従事者との間での勉強会を重ね、連携を円滑に進めるための工夫を継続してきた。こうした地道な臨床活動や研究活動が実を結び、府立医大病院小児内科の糸井利幸准教授との共同研究の端緒が開かれ、先天性心疾患患児の心のありようを心理臨床的観点・発達心理学的観点から検討する機会を得ることができた。

### 2. 研究目的

先天性心疾患に対する手術成績が飛躍的に向上した結果、先天性心疾患患児の早期発見・治療が可能となり、患児は幼児期から前思春期・思春期を経て、成人するという人生の過程を歩むことが可能となった。しかし、先天性心疾患は手術や薬物療法によって完全に治癒する疾患というよりも、慢性の経過をたどるケースが多い。このため、先天性心疾患患児が生きていく上で抱える、心理的発達の問題が新たに指摘されるようになってきた。例えば、心臓手術で施される処置が脳の微細障害を引き起こし、認知障害、自閉傾向等をもたらす可能性が指摘されている（Menahem S, et al., 2008等）。また思春期における怠業問題や、成人期における就労、結婚、妊娠、出産等に関連して生じる心疾患患者固有の問題等へのアプローチも重要性を増している。しかしこのような問題が見出されているにも関わらず、現在までに、先天性心疾患患児の心理面に関する研究、及び心理的援助の方法が十分見出されてきているとは言い難い。そこで本研究では、京都府立医科大学大学院小児内科（研究代表者：糸井利幸准教授）と連携し、成長過程にある本人や家族に対する心理検査や心理療法を通して、先天性心疾患患児がどのような心身の発達プロセスをたどるのか、患児やその家族の心理的発達の課題とはいかなるものか明らかにすることを目的として、(1)K式発達検査・描画の実施 (2)勉強会とケース検討会の実施 (3)学会での研究会活動の発表、といった研究活動を行った。

### 3. 活動状況と成果－(1)K式発達検査・描画の実施

調査面接対象者を先天性心疾患の術後患児とその養育者と設定し、3回の面接（養育者への聴取・患児への発達検査と描画の実施・フィードバック）から構成される1セットの面接調査を、半年に一度という期間を目安として継続的に行った。なお、継続面接を行う間隔を厳密に設定しなかった理由は、心理臨床が重きを置く個別性を重視して、調査協力者との話し合いによって調整したためであった。

6事例（年齢：3歳～13歳・男女半数）の調査面接を実施した結果、次に示す成果が得られた。①協力者

全員が継続調査を希望し、心疾患に特化した相談の場の必要性が浮き彫りとなった。具体的には「発達相談をしてくれる施設はあるが、心疾患という背景を持った子どもに関する相談機関がないので有難い」等の感想が寄せられた。②患児を支える養育者への心理的援助の必要性が示唆された。例えば、調査を通じて検討された患児像を、心理的要因と考える側面等整理してフィードバックすることを通じて、初めて養育者が本音を語り、落ち着きを得るということがあった。この点から、養育者の抱える不安を共に受け止める場を保障することが患児の周囲の環境の安定につながり、ひいては患児の心身両面の成長の可能性をさらに開くことにつながると考えられた。

### 4. 活動状況と成果－(2)勉強会とケース検討会の実施

教員および糸井利幸准教授の指導の下、上記の調査面接で得られた発達検査結果と描画を検討対象として、先天性心疾患患児特有の心理的特徴および各発達段階における心理的課題を明らかにすることを目的とする勉強会・ケース検討会の実施を年間を通じて行った。ディスカッションでは、発達検査で困難な課題に直面した場合に患児が検査者の顔を見て微笑む等の面接場面の振舞いから、患児には対人親和性があるという特徴が浮き彫りとなってきた。これは、患児の示す多動傾向や対人関係の難しさなどの行動特性から、発達障害児や自閉症児と類似した認知特性をもっているのではないかとこれまでの推測とは異なり、患児の人に対する親和的なあり方を示していると考えられた。今後、発達検査を継続的に行っていく中で、患児の成長に応じて変化が見られる検査項目と、器質的要因の関連可能性を考慮する必要がある変化が少ない検査項目を明確にし、患児の心理的発達の特性をより深く検討していくことが課題となると考えられる。

### 5. 活動状況と成果－(3)学会での研究会活動の発表

2011年7月に福岡国際会議場で開催された第6回先天性心疾患心理研究会で、上記に挙げた調査面接内容を中心とする活動報告を目的とした口頭発表を行った。ディスカッションでは医療従事者から本研究を支持するコメントが多数得られると同時に、より広く知られた活動を行う必要性を確認した。よって、現段階での養育者と患児に関する調査結果を分析・整理しており、学会発表を行う準備を行っている。

### 【文 献】

Menahem S, et al. (2008) Children subjected to cardiac surgery for congenital heart disease. Part 1. Emotional and psychological outcomes. *Interact Cardiovasc Thorac Surg*; 7: 600-604.

（文責：中野 江梨子、西浦 太郎、江城 望、高橋 優佳、加藤 のぞみ、岩城 晶子、小出 文香、白木 絵美子）